

学校経営推進費 評価報告書（最終）

標記について、下記のとおり提出します。

1. 事業計画の概要

実施課程名	全日制課程 普通科
取り組む課題	英語教育の充実
評価指標	多読・多聴活動における語数の増加 英語学力調査のスコアの向上（平成29年度に平均440以上、グレード5以上の生徒数30名以上）
計画名	「英語多読・多聴ステーション」を核にした英語力向上プロジェクト ・・・中堅校における生徒の英語力向上、教員の授業力向上、英語指導方法のモデル的改革をめざして

2. 事業目標及び本年度の取組み

学校経営計画の 中期的目標	1 学力向上と進路実現 (1) イ 学習ニーズの多様化をふまえた選択科目の充実をはかり、生徒の能力・適性、興味・関心、進路希望に応じて学習できる教育活動の展開に努める。 (3) 生徒の進路希望を実現させる。 ア 授業の充実の他、講習・ガイダンスの充実等をはかるとともに、25年度より導入した英語学力調査を指標として、入試結果の実績維持・伸長をめざす。
事業目標	1 生徒 ・授業内・授業外における英語力のアップ ・英語を英語のまま理解できる基礎力づくり ・卒業までに30万語読破を目標とし、日常的に英語を読むことへの動機付けをすることで、自律学習へ導き、英語運用能力の向上をめざす。 2 教員 ・多読多聴を取り入れた授業力の向上と、多読多聴の外部への普及展開を図る。 以上を目標に、授業内においては展開教室と図書室、授業外においては図書室を「多読ステーション」として位置づけ、生徒に多読環境を与える。また教員の授業力向上をめざし、「多読ステーション」を中心とした講習会等を開催する。さらにこの成果を踏まえ、他の府立高校や周辺小中学校等の英語の教員や指導者への普及を図る。
整備した 設備・物品	英語図書（朗読CD付を含む）、朗読用CD、CDプレーヤー、ヘッドセット、充電式電池、充電器、ブックトラック、補修用テープ 書架、個別ブックエンド（ボックス型）
取組みの 主担・実施者	・英語担当者 ・図書担当者 ・教職員・PTA等有志
本年度の 取組内容	ノンフィクション分野の読書量を増やしながらか読書を進める。多読ニュースの発行。 「読む」「聞く」「聞きながら読む」を各自選択。 生徒各自による読書記録、読書後のブックレポート作成（読んだものをまとめる。感想。） 読みやすさレベル（YL）～2.0 1冊の総語数平均～10000words程度。ポスター・感想文コンクールへの参加。 ブックレビューの充実。
成果の検証方法 と評価指標	GTECのスコアの伸び（各学年平均が1年推移で25ポイント以上の伸び） 総語数の伸び（経年の比較で1人平均1万語増） 読書速度と理解度の向上（1回20分あたりの読書語数の2割増） 講習会等の外部発信回数と参加者数の推移
自己評価	① GTEC（2回実施）トータルスコア 1年373.3→394.1 2年378.7→411.7 リーディング 1年133.1→144.1 2年138.1→153.0 リスニング 1年138.5→143.9 2年138.6→147.9 ライティング 1年101.8→105.7 2年101.6→109.1 多読活動を取り入れることで、大量のインプットを行う機会を持つことにより、 リーディング・リスニングとともにライティングの向上にもつながっていると考えられる。 グレード5以上の生徒は1・2・3年合わせて65人となっている。(○) ② 多読本 読書総語数 平均1年15672語 2年23119語 3年32350語 1冊あたりの語数平均 1年159語 2年771語 3年920語 1年は当初は1冊あたりの語数が少ないものから読んでいくため、1冊の語数平均が 少なくなっている。3年では多聴活動をする生徒も多くなった。本によっては音声の速さや効果音なども違う ため、語数としては増えなかった生徒もいる。選書に迷う生徒もみられ、そういう生徒には教員側から積極的に 各生徒にあった本を勧めることが必要である。(○) ③ ①のGTECスコアのリーディング、リスニングのスコアの変化から、読書速度や理解度が向上してきた生徒の数は 増えてきている。全体的に読書量・時間は十分とはいえないところもあるが、継続した多読活動の効果は一定 あらわれている。(○) ④ 校内において多読に関する講演会を実施した（3月27日）。他の府立高校や私立高校から10名の参加があった。 参加者の中には、第1回・第2回に続く継続しての参加者も複数名おられた。講演会を通して多読に関する理 解を深め、情報交換をすることができた。(○)
事業のまとめ	英語多読活動が生徒の英語力向上だけでなく、自律的な学習者へと育つために非常に有益なものであることがわかった。多読は即効性のあるものではないが他の活動と組み合わせることによって大きな効果があり、また多読を継続することによって他の技能にも良い効果があることが証明された。読書語数の多い生徒は、読書そのものをおもしろいと感じて取り組んでいた。めざす効果を超えた生徒の姿があった。教員にとっても英語の授業デザインを再構築するきっかけとなった。多読指導には教員側の多読経験が前提であり、教員の英語多読に取り組む姿勢は生徒にいい影響を与えていた。授業外での生徒の多読活動は貸し出しのシステムも含めて今後も継続して検討すべき課題である。3年間で蓄積できたことを基に、この多読への流れを止めることなく蔵書数・種類をさらに充実させていくことで多読活動の次のステージへと進めたい。